

わたしは、小さい時から心配性のところがあります。例えば、買い物に行ったりして、妹が少し見えなくなっただけでも、すごくドキドキしたり、むかえに来るお母さんがおそいとすごくあせったりします。塾がある日も、朝起きてから家を出るまでの間にトイレに十回くらい行ったこともあったし、塾に行ってからテストの直前に勉強していると、いきなり鼻血が出たこともありました。わたしは、なんでこんなに心配するのかなあ。と思うたりします。

わたしは、前に、うつ病のお母さんを四つ子の子どもとお父さんが見守っていく本を読んだことがあります。十才の四つ子で性格はそれぞれちがいましたが、その中の一人は四つ子で手がかかるからお母さんがうつ病になったと心配していました。でもその子は、お母さんが退

院するまでの間に心が強くなって成長していき  
ました。とてもいいお話でした。

私の心配性なのを、お母さんは、

「M 妹しが迷子にならないのは、Rが心配して  
見てくれるからだよ。」

と言いながら笑ってくれます。

「Rは心配性だから落ち着いてテストを何度も  
見直して受けれるんじゃないの。」

と言ってもくれます。でも、私がお母さんに、

「心配したら落ち着けんやろ。」  
と言おうと、

「いい心配性もあるさ。」

と言いながらまた笑いました。

わたしは、この本のうつ病のお母さんを見守  
り心配してなやむ四つ子の一人のように、心配  
性を治すのは難しいと思うけれど、お母さんが  
言ってくれたように、いい心配性もあるんだ。  
と思って、いつか少しずつ心が強くなっていった  
らしいなと思っています。

ぼくが宿題をしていると、

「H、これ、息ぬきだ。」

と母が笑顔で言ってきました。ぼくが、何、何？と母の方を見ると、その手には、なんとぼくの大好きなネコの本を持っていました。

さっそく読んでみると、すごく面白くて、ぼくは思わず笑ってしまいました。ぜひ母にも読んでもらいたいと思って、

「ねえ、お母さん、これ読んでみたら。面白い

よ。」

と言うと、母が、

「じゃあ読んでみようかな。」

と、その本を読み始めました。すると、さっそく笑い始めたので、やっぱり笑ったな。しと思いなから、

「お母さん、面白いやろ。」

ということ、親子二人で読みはまりました。

しばらく読んでいると、母が、

「H、面白いね。また後で読もうかな。」

と言って用事をしに行きました。ぼくは、区切りのいいところまで読み終わると、

「お母さん、ありがとう。面白かったよ。」

と言って直しました。

その本は三巻まであるそうなので、全巻そろえて上手に息ぬきしたいと思いました。